小学校

事例⑩　１年生・入学前より通年（特別支援学級）
ねらい「学校の生活・友だち・環境に慣れる」

「特別支援学級の生活について：一人ひとりが安心して学ぶことができる場を目指して―」

本事例とつながりが深い「１０の姿」

- １　健康な心と体
- ５　社会生活との関わり

１年間の目標

児童の発言・行動が特性によるものなのかそうではないものかについて正しく見極め指導・支援を行う。その際、受け入れられていることが伝わるような指導・声掛けを考えていく。
学校の生活・友だち・環境に無理なく慣れ、健康に過ごせるようにする。

子どもの姿

〇児童の様子
- 初めてのことや慣れないことに不安が強く緊張してしまう（何が起こるのか予想をすることが難しい）
- 感覚過敏がある（不意に聞こえる大きな音　味覚の過敏）
- 友だちとの関わりに緊張がある（登校すれば頑張る姿が見られるが、実際はとても緊張している）

〇本学級が大切にしていること
- 特別支援学級の強み（※１）を生かし、子どもに寄り添った支援・指導を行う
- 健康に穏やかに過ごせるよう、保護者と連携する
- 少人数のなかで、友だちとの関わりを深め、互いの良さを認め合い、支え合い、協力する関係が築けるよう指導する

※１特別支援学級とは、個に応じて指導の目標や内容、方法を工夫し、一人ひとりの障害の種類や状態、特性、発達段階に応じた指導を行い、社会参加や自立を目指すための学習を行う場

学びのはじまり

〇入学前より、見学・体験授業の実施・通常学級の見学・入学前面談・在籍園との情報交換などを行い、子ども・保護者・小学校がこれからの小学校生活に見通しをもてるようにしました。

内容１　給食のこと　（においなどの感覚過敏に対応するためしばらくはお弁当にする、白米などなら食べられる等の対応）
内容２　学習のこと　（文字の書き順・使用する教材は同学年の児童と同じか別か…ドリルによる情報量を考えて）
その他　緊張により疲れやすいこと・トイレには小さい便器があるか・外履きを草履にしてよいか・お守り代わりの持ち物などについて

安心して登校するために：環境の工夫

■環境の工夫①　学校が穏やかで安心できる場となるように

タオルケット
ぬいぐるみ
ブロック
ミニカーなど

安心のひとときが過ごせる場を用意

≪教師の　〇願い・思い　◎配慮事項≫

〇疲れた時に休める場所（カーテンで仕切られた畳コーナー）を確保する。疲れた時には休みながら穏やかに過ごし、次第に学校生活へと慣れていけるように。
〇お気に入りのものを学校にも置いておき、穏やかに過ごしてほしい（一人ひとりの児童に応じたものを）。
◎死角になるため、安全を確保できるよう児童の様子から目を離さないようにする。
◎学校の滞在時間については、本人の現在の様子・保護者の意向を大切にすることを本人と確認する。

■環境の工夫②　落ち着き・集中して学習に取り組むことができるように

パーテーションがあると落ち着く子も

〇授業には参加したいけれど、集中できない時に、居心地の良い場所の確保をすることで、心を落ち着かせてほしい（休むためのものではなく、心やすらげる場所として）。
〇孤立するのではなく、その子にとって適度な距離をもちながら、友だちの気配を感じつつ食事をしてほしい。給食の香りも準備や片付けの様子も感じていられるように。
◎パーテーションは教師の隣に設置し、安全も確保。
◎出入りは自由で、誰でも使用できる場として活用する。

１０の姿との関連、自覚的な学びへ向けたポイント

①　自ら健康で安心・安全な生活を作り出す　（１ 健康な心と体）
初めての小学校生活は期待に溢れつつも、子どもたちは次第に緊張や疲れも感じるようになってきます。子どもは時に、強い緊張を見せたり、神経が昂ったり、注意が散漫になったり疲れが溜まりやすくなったりすることもあります。子ども自身が穏やかな気持ちになれるような環境（人や場等）を設けておくことは、新しい生活に「無理なく、次第に慣れていく」ための配慮です。教師は一人ひとりの子どもの心身の状況を丁寧に見取り、子ども自身がいまの心と体の状況を理解し、自ら健康で安心・安全な生活を作り出せるよう働きかけています。その際、子ども自身が環境を「選べる」、内容の「見通しをもてる」、つまり、幼児期の教育においても大切にされてきた主体性を尊重した配慮がなされていることがわかります。

見通しをもって生活するために：「明日の予定ボード」

１日の流れには
・教科名
・活動の内容
を簡単に書く。

1日の見通しをもつことにつなげる掲示の工夫

≪教師の　〇願い・思い　◎配慮事項≫

〇次の日（又は次の登校予定の日）の予定を知り、見通しをもって活動してほしい。

◎前日だとより詳しく知らせることが可能になる。
◎下校時に保護者の方と一緒に確認する。

≪配慮の工夫≫

■交流するときは…
- 行事の前には本人の体調や状況をその都度確認し、参加できるよう体制を整える。
- 交流するときは安心感がもてるよう、担任（大人）と一緒に参加する。
- 活動の前には、子ども自身に内容や見通しを必ず伝える。
- 友だちに慣れるため、休み時間に交流クラスへ大人と共に行き、遊ぶ時間も設ける。
- 友だちの名前を覚えることが苦手だと感じている子どもは、メモ帳を持ち歩き、自分で記入する姿が見られた。（付き添いの大人も名前を覚えてくるようにし、保護者に伝えた。家での会話で大いに役立ったとのこと）

1年生を迎える会に向けた交流

■児童の「今」を把握するために
- 入学前から複数回の面談を行い、1年間の方針を立てる。
- 日々の連絡帳や送迎時のやりとりを活用し、児童の情報共有を行う。
- 日々の児童の様子を担任だけでなく、スクールアシスタントと共に捉える。（その際、この発言・行動は特性によるものか、そうでないものなのかを見極める必要がある）
- 上手く取り掛かることができたら安心や心地よさが保障できたと捉える。
- 少しずつのステップアップは必要だが、結果は急がない。
- 可能であれば、主治医の先生との情報共有の場を設定する。

学習について、児童の変容

【学習は　みんなで／個別で　柔軟に】
〇学習機会の確保を行う。
- 使用する教材・内容・分量については児童の実態に応じ、保護者と相談しながら進めていく。
- 登校できた時に、焦らず少しずつ進める。
- 家庭学習に委ねる時もある。無理強いはしない。
- 学習量は体調を見ながら調整（教師・保護者）
- 学校で取り組めた時・宿題が提出できた時には、大いに認め・称賛する。
- 学年別・課題別に授業を設定する。1時限の中では、個に応じた「個別学習の時間」と、みんなで考える「みんなで学習の時間」とを設定している。

〇登校できた時には、自分で頑張ろうとする姿が見られた。トークン制（※２）を導入した時期もあったが、大人が大いに認め・称賛することが一番の意欲につながることがわかった。
〇皆と同じ教材を使用することで安心感が生まれるようであった。
〇家庭学習はできるときに取り組む形にすることで、気持ちが楽になっているようである。しかし、一度に出す量が多すぎると「全部やらなくてはいけないのではないか」という気持ちになってしまうので、提示する量は慎重に考える必要があった。

※２子どもが望ましい行動をとった時にトークンという目印（例シールなど）がもらえる。それを貯めて「ご褒美」と交換する制度